

Discourse on cultural propaganda during the Pacific War —the south, ethnic groups, and the Greater East Asia Co-prosperity Area

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper, I have attempted to research and analyze the discourse of cultural propaganda during the Pacific War. As there is little previous research on these discourses, I worked on unearthing wartime material.

In Chapter Two, I analyzed the discourse on Southern cultural propaganda. As a case study for further analysis, I specifically focused on discourse on the Dutch East Indies before the start of the Pacific War. From the aforementioned examination, I have precipitated the basic structure of cultural propaganda discourse.

In Chapter Three, I analyzed the discourse around cultural work starting from after the beginning of the Pacific War and paying particular attention to the keywords of ethnic groups. In the discussion of this section, I followed the trends that this discourse on cultural propaganda will reflect in the ideology of the Pacific War.

Finally, I analyzed the discourse surrounding the relationship between literary figures and cultural propaganda at that time. In conclusion, I pointed out that through these discourses, literary figures have contributed to uplifting the war and gained sociality.

太平洋戦争期の文化工作言説

——南方・諸民族・大東亜共栄圏

松本和也

I

「大東亜共栄圏」という言葉は、昭和一五年に第二次近衛内閣の外相・松岡洋右が用いはじめたとされている。⁽¹⁾ 太平洋戦争開戦前に刊行した『興亜の大業』（第一公論社、昭和16）において松岡は、来るべき対米英戦を想定して次のように論じていた。

日支間に於ける融和と融合の関係は、独り日支間に於て要請されるばかりでなく、広く日滿支と南洋諸国をも包含したる、大東亜諸民族間親にも植付けられねばならぬことを痛感する。蓋し是れは実に多年東亜に加へられた欧米勢力の桎梏から東亜を解放し、進んで大東亜の發展興隆を成就せしむる基本条件だからである。

ここには、栄沢幸二が《大東亜共栄圏の思想の基本的な主張は、大東亜戦争は米英の利己的な自由主義的世界観に対する八紘一宇の日本の世界的世界観の戦い》²⁾だとまとめる、太平洋戦争を支えるイデオロギーが示されているが、『興亜の大業』には次の一節もみられる。

興亜の大業完遂に対しては、欧米を総拏げにしての妨害と抵抗とが一応は予想されることを忘れてはならない。興亜の大業は、欧米列強をして謂はしむれば、亜細亜の反逆であり、大東亜の新秩序は欧米本位の旧秩序は欧米本位の旧秩序の破壊である以上は、利害相反することは明白だからである。私としては飽迄も、斯かる考の甚だ浅薄にして、来るべき世界全体の新秩序も亦詮ずるところ諸国民・諸民族の解放と謂ふ八紘一宇の大精神によらなければならぬ事を悟らしめ、窮極するところ大東亜共栄圏の建設により、彼等も却つて利するところ多き所以を納得せしめなければならぬと思ふのである。(292～293頁)

こうした構想は、太平洋戦争の開戦によって一挙に現実化していく。真珠湾とマレー半島への攻撃によって幕開きとなった太平洋戦争は、南方各地にも戦場を拡張していき、そこでは武力戦にくわえ、現地の統治・文化工作も喫緊の課題とされていくだろう。

太平洋戦争期における文化工作については、情報局記者会編『大東亜戦争事典』(新興亜社、昭17)に「南方文化工作」という項目が立てられ、そこに次の解説がみられる。

南方に対する文化工作の基調は大東亜共栄圏建設の大理想成就に奉仕することにある。一般的にいつて

(一) 南方の諸地域諸民族から誤れる米英の思想文化を排斥し (二) 南方諸民族個有の文化の保全育成を図り (三) 日本文化を基礎として南方諸民族の精神的思想的指導をなすことによつて大東亜の文化的向上と共栄を図ることをその目標とする。南方の諸民族が永年にわたつて米英等の植民地、保護国とせられ、誤れる自由主義、個人主義や低劣卑俗な趣味を優秀にして進歩的な文化なりとして教へ込まれ、かつ種々の不道德な習俗に染ましめられた結果、南方諸民族個有の文化的業績は廢墟と化し、その美点長所の忘却されたものが少くない。これを發掘し回生し、南方諸民族をして自己の文化に憧憬と矜持を持たしめることが必要である。こゝに生れる大きな喜びを将来への大きな輝ける希望に導くため日本文化が積極的に發揚されねばならぬ。我々はこの未曾有の大事業に従事するには殆んど何等の準備も研究も持ち合せなかつたことを自覚して、出来る限り誤なきを期さなくてはならない。(271～272頁)

右の事典項目においては《大東亜共栄圏建設の大理想》に即すようにして、南方諸民族に対する文化工作の必要性が大局的に説かれている。こうした文化工作は言説／実践ともに終戦までつづいていくが、その歴史的な調査・検証はこれまであまり進んでいない。

そうした中、赤澤史朗は戦中・戦後文化論の一環として文化工作に論及している。戦時下文化のうち太平洋戦争開戦後にみられた《変化》の一つとして、赤澤は《大東亜共栄圏》各地に対する「文化工作」論が、文学・

音楽・美術・映画などおよそ宣伝に利用できるあらゆる文化領域で、いつせいに浮上してきたこと》をあげ、次のように論じている。

この時まで多くの日本人は、南方各地の民族とその文化についてほとんど知ることがなかった。そこからは、一方でかなり独断的なステレオタイプ化した認識が生じる。それは、南方諸民族は文化程度がもともと低い
うえ、欧米の「敵性文化」に侵食されているというイメージである。こうした蔑視に立脚した「文化工作」論は、「工作」の対象となる民族の文化の価値を頭から否定しており、そのため日本からの一方的・独善的な注入・宣伝論に傾斜しがちであった。⁽³⁾

ただし、赤澤は《しかし、この時代の「文化工作」論のすべてが、こうしたものであったわけではない》と補足し、《そのなかには、今日に至る長期的な視野から見れば、南方諸民族の多様な文化に対する日本人としての最初の理解を示しているものも含まれていた》⁽⁴⁾とも指摘している。もちろん、《大東亜共栄圏の思想》に即したものが支配的であったにせよ、本稿でも、同時代の《「文化工作」論》にはさまざまなものがあつたことをふまえて、改めて同時代の文化工作を主題とした言説の調査・分析・考察を展開する。

II

本節では、太平洋戦争開戦以前の、南方文化工作に関する言説を検討しておく。なお、ここでは南方全域ではなく、当時、日本との緊張・利害関係が顕著になりつつあった蘭印（オランダ領東インド）に調査対象を絞って、文化工作言説を分析していきたい。

太平洋戦争開戦前、『日本の対大東亜の文化指導に課せられた責任は極めて大きい』と声明する石井文雄は「大東亜共栄圏と文化問題」（『東洋』 昭16・11）で、『大東亜各国民族をしてそれら、大東亜の本然に還り、大東亜の文化的、歴史的、理想的、思想的特性にめざめさせること』に『大東亜の復興がある』（99頁）として、次のように論じている。

大東亜共栄圏の確立のためには、この際先づ以て文化問題が無視することの出来ない使命を持つものであり、これが、対策の樹立がまた、最も根本的にして且つ永久的、精神的、平和的、有数的なものであるから、特に大東亜共栄圏確立の緊急を要する今日、こゝに殊更文化対策確立の必要を提唱する所以である。（106頁）

こうした言説の背景に、大東亜共栄圏（こと南方各地）に対する帝国日本の政治的・経済的関心があったことはいままでもないが、それゆえに文化工作が重視されたということでもある。『最近蘭印を旅行して見たそのまの現実を基礎に、蘭印統治上の諸問題を語り、そこに植民地統治上吾々が学ぶべき幾つかの教訓を吸み取らうとする』（232頁）という性格をもつ「見たまゝの蘭印統治問題」（『改造』 昭16・7）において山田文雄は、『吾々が蘭印に行つて第一に受ける印象』を、『極めて平和であり、土人の生活も平穏で、如何にも楽土南洋の名に適

はしい」と紹介しつつ、同時に《勿論国際政局の慌たゞしさと、世界情勢の緊迫とを反映して、何となく緊張した唯ならぬ空気が漲つてゐる事は否めない》(233頁)ともいう。そうした蘭印をめぐる、山田は次の政策提言を示していく。

オランダの蘭印統治は土人の搾取によつて本国の繁栄を計つたと云へるにしても、その搾取は彼等をして搾取と感ぜしめない程度のものであつた。(略)彼等の政策の目標は、高遠な理想を説くよりも、土人の習癖に即した現実の政策を実行するにある。日常生活の中に植民政策が行はれてゐると云ふ事がその真相を伝へる最も良き表現であらう。吾々は欧米各国の植民政策を単純な搾取主義として非難し去る前に、その実績から学ぶべき多くのものを汲み取らねばならない。(240頁)

ここで山田は、オランダ政策に一定の評価を示しているが、右に言及のみられた《日常生活の中に植民政策》を展開していく局面にこそ、大文字の政策とは異なる小文字の文化工作という問題領域がある。山田は「蘭印視察報告 ジャワ及びジャワ人」(『新亜細亜』昭16・6)においても、《吾々は蘭印、特にジャワの土人をして日本を理解せしめ、日本人の正しい姿を認識せしめなければならぬ》という立場を示し、次のように論じている。

その為には、一方で日本人が彼等(『蘭印、特にジャワの土人』)を理解する事が急務である。東亜共栄の理想は高くして且遠い、彼等ばかり、高遠の理想を会得するに余りに文化水準が低いのである。彼等をして

吾々に追隨せしめる為には、もつと卑近なもつと直接な点から手をつけなければならない。(83頁)

ここで、山田が現地人のレベルを正しく認識することを訴えつつ、『もつと卑近なもつと直接な点』として重視するのも、生活における文化工作という問題領域である。『日本の南進は毅然とした且つ現実的な方策にた、ねばならない』(252頁)とする津軽国雄は「一在留邦人の蘭印実感」(『中央公論』昭16・3)において、次のような主張を展開する。

インドネシア人のみならず、東亞諸民族の解放問題も盛んになりつゝあるが、兎に角、彼等に日本の真の姿、その道義と文化と実力とを認識させる事が必要であると共に、我々も亦彼等を理解し、認識する事が急務である。日本が八紘一宇の大精神から堂々蘭印政府と経済的に相結ぶと共に、東亞共栄圏を基礎づける共通の民族感情をもつて、インドネシア人の信頼に力強く応へねばならない。(253頁)

また、南方全域を視野に収めた、板垣與一・平貞蔵・山田文雄「南方圏の現実」(『改造』[時局版19]』昭16・6)も参照しておく。記者の『日本の南方策としてまづどういふ角度から手を打つべきかといふことですね?』という問いに、山田は次のように応じる。

結局その「南方の」内部に於ける経済的な相互依存関係ですね、こいつを深めてゆき、さうして日本が中心

になつてそれを更に政治的などころまでも持つてゆく。「略」南洋と日滿支といふものを含めたやはり東亜共栄圏の結局確立になりますが、そこへ持つてゆくためには、まづ第一の問題としては、日滿支といふものが本當の同一にならなければならぬと思ひます。その籐が緩んでは南洋には力が及ばんと思ふのです。「略」具体的にいへば、仏印との關係が真先きに來るのではないですかね。で、これが旨くゆけば、それが試験台になつて、さうして泰との關係もうまくゆくし、蘭印との關係もうまくゆく——といふ第二段の發展があるんぢやないか。(299頁)

ここで注目すべきは、大東亜共栄圏内におけるさまざまなレベルにおける先後關係である。第一に、大東亜共栄圏において日本こそが経済的・政治的(そして文化的に)主導権を握らなければならないということ。第二に、日滿支一体化の確立を優先して、その發展的延長線上に南洋を支配していくべきだということ。第三に、南洋に於いても、仏印問題を解決してから蘭印へといった順序が想定されていたこと、といった先後關係である。

さらに、「日蘭印不調と新南方策の目標」(『改造(時局版20)』昭16・7)において山田は、『昨年九月以來蘭印の首都バタヴィアで開かれた日蘭印会商』が『不調に終り、芳澤全權使節の引上と云ふ最悪の事態』(20頁)を迎えた後に、次のように論じている。

文化政策の效果は之を早急に期待し得るものではない。併しながら長きに亘つて見る時は、その影響は広くして且つ深いものがある。「略」その結果、一國の國際的地位が高まり、引いてはその政治的經濟的權益が

増進される事は歴史上珍らしい事ではない。／吾国南方政策の新しい基調は、力の政策であると共に文化の政策でなければならない。(22～23頁)

ここで山田は、『政治的経済的權益』を見据えて、文化工作の有用性を訴えている。

こうした言説状況の中、太平洋戦争開戦の危機に応じた文学者からの発言もみられた。《今日、緊迫せる世界情勢の只中にあつて、文学やその他の文化が、文化動員の形に於て、その役割や性格を示さうとしてゐるのは、誰にも明らかな事実》(8頁)だと断じる市川爲雄は「文化動員と文学者」(『早稲田文学』 昭16・11)において、《今日の状態は、文学者にぢかに国家や民族の帰趨を考へさせようとしてゐる》、《臨戦体制下の文学とは、特長として文学者の中に、この様な直接的な感覚を醸成させたことを意味する》(8～9頁)と述べ、さらに、《この場合、文学者としての資質に於て国家に奉仕することが必要》だと述べて文学者としての《奉仕》——《多数の国民を感動といふ大きな武器の中に溶け込ませることに依つて、自己の存在を示すこと》(10頁)を求め、次のように論じていく。

文化動員としては、傷病兵慰問、大陸への文芸慰問等が行はれてゐるが、やはり、こゝ暫くは報告文学の形式が主流となるのではないかと思はれる。又炭鉱、海洋への文学者派遣なども行はれてゐるが、これは屢々現実面とタツチする機会を失ひがちだつた現代文学内の新生面でもあり、綿密な観察や旅行記等の中に、現代文学精神の発露も覗はれるわけである〔。〕これらは現代文学者と外的世界の交流といふ点で興味が持

たれるが、かゝる現実面への接触を機会に、現代文学の中にも新しい人間や生活のタイプが創造されて来るのだと思ふ。新時代の文学は、時代を動かす一つの推進力となるべきものである。(10～11頁)

文化工作という問題領域に関して文学(者)が担うべき役割とは、狭義の文学というより広義の文化領域にあった。しかもそれは、日本文化を核とした大東亜文化であることが望まれた⁽⁵⁾。この間の事情は、石井文雄「大東亜共栄圏と文化問題」(『外交時報』昭16・12)に詳しい。大東亜共栄圏を視野に入れる石井は、次のように大東亜文化を論じている。

大東亜共栄圏確立のために、その大東亜が経済的には共存し、政治的には共盟するためには、その根底に東洋を愛し、大東亜を共守するといふ運命共同主義に出発しなければならぬ。そのためには、大東亜が共ニその各国各民族の伝統に目ざめ、その歴史を認識しなければならぬ。こゝに文化といふことがその国その民族の特殊性として確把されて来る。そして、大東亜は大東亜の手に、大東亜人は大東亜人の手によつて確立するといふことが必要となつて来る。こゝに大東亜の歴史伝統といふものが、文化といふ一つの統合したものの、上に採り上げられて来る。大東亜には大東亜の文化がある筈である。こゝに真の連盟、其の提携といふものが結ばれて来る。

さらに石井は、『大東亜の文化圏』を『圏内各民族各国家の文化の総合』(40頁)だと定義し、『日本なくして、

大東亜なく、日本文化なくして大東亜文化はないのであるから、このための日本の地位は認められなければならない》(43頁) という論理を經由して、《文化的に、日本が将来、提携を指導との役割を持つ文化的盟主であることが望まれる》(49～50頁) と論じて、大東亜共栄圏―大東亜文化における帝国日本の位置を示していく。

一応は、《東亜新秩序の文化工作といふ作業はきはめて慎重に構築されることが必要であり、その原理的イデオロギイは世界的に承認されるばかりでなく、これまでの植民地民衆をも反発させることのない人道主義的見地にたたざるをえない》(矢崎弾「東亜新秩序と文化工作――むしろその基礎概念をめぐりて――」、『文芸の日本的形成』山雅堂、昭16、349頁) といった声もあがってはいたが、こうした主張が言説上で力をもつことはなかった。

総じて、この時期の蘭印をめぐることは、武力のみならず文化工作の必要性が繰り返し強調され、日本が諸民族を主導して大東亜共栄圏の確立を目指す言説が産出されていった。しかも、こうした文化工作言説は、太平洋戦争開戦後にも範型として反復されていく。

III

本節では、太平洋戦争開戦後における大東亜共栄圏―南方を対象とした文化工作を主題とした言説を、頻用される《諸民族》という鍵語に注目しながら、分析していきたい。

まず、澤田謙「太平洋の諸民族」(『青年と教育』昭17・1) を参照すると、大東亜共栄圏―《太平洋の諸民族》について、《大体、仏印、タイ、ビルマ、英領マレー等の半島民族と、蘭印、英領ボルネオ、フィリッピン等の

大島嶼民族と、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア等の無数の小島嶼民族》を《範圍》(20頁)とすることが確認されている。

もちろん、太平洋戦争開戦後にも文化戦が軽視されがちな状況をふまえてだろう、無署名(「巻頭言」)文化建設の重要性(『南方資料』昭17・2)には、《文化の戦ひを重要視せよ》、《これこそは、東亜新秩序建設の大眼目である》(1頁)という訴えもみられた。⁽⁶⁾

具体的な文化工作への論及としては、無署名「文化時評 諸民族を如何にして導くか」(『真理』昭17・2)がある。《大東亜共栄圏——十億民衆を包容する広大きはまる共栄圏の実現が期待されるに至つた》ことをうけて、《今後の問題は、如何にして、血を異にし、歴史の異なる十億の諸民族をして、その土地の資源開発に努力させることが出来るか》(50頁)と日本サイドの問題設定を示す同論では、《従来英米の指導下にあつた民族に対しては、彼等が英米によつて享けてゐた恩恵以上の恩恵を与へること》を《第一条件》に掲げ、《日本が、英米以上に工業品を彼に供給し、英米のやうな搾取をせず、よりよき生活を保障してやること》(51頁)だと、対米英を強く意識した指針が示されてもいた。

また、《一体、共栄圏の諸民族に対する文化工作といふものは、第一に相対的工作、次ぎには絶対的工作の二色ある》と論じる西村眞次が「南方共栄圏への文化工作の特殊性」(『国際文化』昭17・2)で掲げていた《相対的工作》とは、《社会的工作》、《技術的工作》、《土俗的工作》、《言語的工作》といった一般的な文化工作を指し、《本来文化を尊重して、猥りにそれを更改しようとする企てないこと、若し更改の必要ありとすれば、それは漸を逐うてなすべきこと、いふ二つの原則》(10頁)を掲げるものだった。ただし、同時に西村は《指導国》と《被指

導国》(諸民族)とが《共同の利益と繁栄とを期する》という原則に立ち、《絶対的工作》の必要性も強調する。

これは《加盟民族が共栄圏の要請に応じない場合には、強大な統制権の発動によつて、強制的に其要請に応ぜしめるだけの実力を備へたものが、共栄圏内の全民族を指導する位地に立ち、常に監督と指導とを与へる》(11頁)というもので、諸民族に対する理解、馴致にくわえて、西村は強制的な《指導》を肯定してもいた。さらに、西村は「南方共栄圏特輯」(『宣伝』昭17・2)によせた「南洋の諸民衆と其文化」では、《大東亜共栄圏の四至》について《大体われわれが『南洋』といつてゐる場所で、人々によつて範圍が異つてゐるが、先づフィリピン諸島、蘭印諸島、マライ半島、ビルマ、印度支那、泰、それに豪洲や印度を入れても差支えない》、《我邦の統治してゐるミクロシヤが其中に入ること勿論》(13頁)だとした上で、《如上の広大な地域に於ける様々の民族群を打つて一丸とし、相互の利益と繁栄と生存とを招来しようといふのが、我々日本民族の提唱する所の大東亜共栄圏》(15頁)だと論じていた。

あるいは、《南方共栄圏に対して、今日なが一番大切かといふと、南方諸民族との融和》であり、《これなくしては、東亜新秩序の建設は出来ない》と述べる窪田文雄は「南方共栄圏に対する文化工作の根本」(『文化日本』昭17・3)において、《文化工作の前進なくしては、民族の提携は行はれない》がゆえにその《重要性》(27頁)を指摘する。その上で窪田は、《各地域と各民族に対して同じ筆法で文化工作をすることは出来ないが、文化工作の根本理念は絶対に一元的でなくてはならない》として、《米英的旧秩序文化の駆逐》という理念を掲げる——《何となれば、大東亜戦争は米英的旧秩序文化に対し、全面的闘争を通じて正義に基づく世界新秩序の建設といふ、偉大なる文化創造の戦争》(28頁)だからである。こうして窪田は、《世界新秩序の建設》を最重要目

標に掲げる。

このように、必ずしも諸民族の理解が最優先ではないにせよ、文化工作（の遂行）のためには南方諸民族の情報・理解が必須だという認識が広まる中、特輯「南方文化の現状」（『知性』昭17・3）が生まれ、同誌同号の無署名「編輯後記」には、『長い間英米のあやつる誤られた文化に毒されてゐたこの占領地域の文化工作を清明に遂行し、光輝ある大東亜文化に浴せしめてゆくことは残された重要な課題』（160頁）だと記された。山田文雄は「蘭領印度の文化」で、「見たま、の蘭印統治問題」（前掲）の持論を繰り返した上で、『文化の問題は政治、経済の問題と並んで民族統治上須要な問題の一つである事を吾々は銘記せねばならぬ』（31頁）と述べて、文化工作への深慮を促していく。太田喜久雄「マレーの文化事情」では、文化工作の前提となる地理、民族の構成・特徴、宗教から文化の程度までが詳細に報告されていく。『ビルマ族の文化は殆んど印度の影響を享けて来てゐる』（35頁）ことを指摘する「ビルマの文化」の蒲池清は、『今次大東亜戦の結果ビルマが真に独立せる東亜民族国家として再出発を得てはじめてビルマ文化の発展がその国民意識の発揚と共に期待される』と述べつつ、『同時にその一半の責を吾が大和民族が荷ふ可き』（37頁）だとして日本の関与（文化工作）をすべりこませていく。『西班牙文化の齎した影響は今日亜米利加の物質文明の影に蔽はれてはゐるけれども、西班牙文化の残した足跡は比島の中老階級のインテリゲンチヤの間に於て尚強く把握されてゐる』ことを指摘する「比律賓の文化」の佐々木勝三郎は、『今後比島より米国の勢力が芟除されるに随ひ、西班牙文化が台頭し復興を見るに至ることが期待される』、『我国としてはこの気運を十分に理解し之を善導する準備研究と其の用意が緊要』（39頁）だと述べて、世代交代に伴う米国勢力の衰退の機を逃さず、日本が比島支配の主導権を奪うことをねらっている。

特集のほかにも、『八紘一字の大精神は、東亜に共栄圏を確立し、諸民族をしてその処を得せしむる新秩序建設を旨としてゐる』(29頁)ことを確認する伊地知進は「南方共栄圏今後の問題」(『時局雑誌』昭17・5)において、『強き者即ち支配者——これは南方の鉄則』(30頁)だと断じた上で、大東亜共栄圏・南方の絆を『分家的地域』(35頁)と位置づけ、『血——血縁』という紐帯によって大東亜共栄圏を家族と喩えていく。また、『現在の南方民族は印度、支那、アラビヤ、最後に欧米の文化の影響を甚だしく受けた』ことよって『欧米文化は単に文化に止まらず彼等の政治形態、精神生活、物質生産の全部を支配し、欧米属領化してしまつた』ことを嘆く小山榮三は「南方共栄圏の諸民族」(『現地報告』昭17・6)において、『今や我が日本は大東亜共栄圏の確立によつて彼等の欧米属領性を払拭し、支那同様に民族解放の世界史的課題を彼等に代つて解決せんとしてゐる』(99頁)と、南方諸民族にとつての太平洋戦争の意義を、『大東亜共栄圏の確立』と重ねて言表していた。大岩誠は「南方に対する文化行動」(『知性』昭17・6)において、まずは『大東亜戦の展開せられる以前から、当然、戦場となるべき運命を米英の挑発によつて与へられた南アジアに関する論議は、これらの地域に生を享けた土着民を相手とする文化工作の問題が一つの重要な課題として、わが国有識者の関心の中心となつてゐた』(22頁)と、文化工作を改めて問題化する。また、『文化行動は畢竟その第一義として皇国文化の本質についての確かな認識を要請する』と説明する大岩は、『次に必要欠くべからざるもの』は『相手たるべき地域原住民の固有の文化並に西洋民主主義諸国によつて強制せられた植民地知性の所産を十分に理解し、その夫々の実態、歴史的役割、社会生活における比重及び影響力等々、わが文化行動の対象物の評価である』(24頁)と言表していた。

このように、文化工作言説においてはしばしば日本が大東亜共栄圏を主導する根拠が論及され、確認されてい

く。保田與重郎が「日本文化の世界構想」(『興亜』昭17・3)において、『文化思想上の対外工作を今日考へる人々に、私は必ず本居宣長の「駁戒慨言」の精神を悟ることを要望したい』、『宣長はすべての文化とは皇国の尊厳を旨として説くことをそのみちと云つた人である』(61頁)と述べたのも、その変奏の一つといえる。

ここで、大東亜共栄圏における文化工作の前提として、この戦争の意義を改めて確認した特輯「大東亜戦争」(『思想』昭17・6)も参照しておく。「世界史の哲学」のイデオログ・高坂正顕は「大東亜戦と世界観」において、『今、大東亜戦争を通じて明かに世界的民族である自覚を昂めつつある』ところの『我々の世界観』を『世界史的世界観』と称した上で、『そこに大東亜共栄圏と関連する新世界観樹立の方向』(5頁)を見出し、従来た。こうした前提にたち、平野義太郎は「諸民族統治・指導の原理」において『土人の發達は危険だから、従来
の無知識水準に止めて放任して置く方がよいといふのが、オランダの蘭印教育政策の基調であつた』(25頁)と統治政策に論及し、次のようにつづける。

過去数世紀にわたる米英蘭人の外部からの圧力に対抗し、大東亜諸民族に共通する文化結合の紐帯を地盤とし、分散せるが故に統一性を欠いてゐた太平洋各島嶼を連合し、そしてこれら諸民族の團結をつくり出すべき統一的生活形態は東洋の精神と西洋の科学とを融合しつつ近代化を遂げた日本によつて著手された。

〔略〕これら諸民族を糾合團結し、大東亜の一体基盤を工築すべき民族指導・統治こそは、盟主、日本に課されてゐる最大の任務に外ならぬ。(28～29頁)

さらに平野は、《南方圏諸民族に対する統治・行政の指導方針》として、《異民族統治の要諦が異民族の宗教・道徳・慣行を尊重し、治安に害なきかぎり不必要な容喙又は性急な改正を加へず、土着人官吏をして土着人を治めしめ、日本官吏はただ枢要な地位にあつて大綱を統べるに止め、先づ、大東亜戦争を完遂するために、各民族をして自発的に協力せしめ、軍需資源の開発を各民族の職域奉公とし、食糧・衣料の自給自足、労働力の規律ある訓練へ向つて熱帯民族を自主的に錬成し自強せしめること》(29～30頁)を指す。岩村忍は「亜欧大陸諸民族活動の方向についての史的考察」において、《日清、日露両戦役によつて日本民族が東アジアに於て決定的役割を演ずることとなり、大東亜戦争によつて世界的使命を持つやうになつた》という、帝国日本が大東亜共栄圏を主導する地位を獲得した来歴を確認し、その根拠として《日本民族の内在的優秀性》(49頁)をあげていた。いずれも、太平洋戦争を戦う帝国日本の世界的使命を正当化する言説だといえる。

こうしたイデオロギーは、次に引く成田穰「大東亜戦争と南方諸民族の新生」(『公論』昭17・8)では、帝国日本が大東亜共栄圏を主導し包摂するものとして展開されていく。

大東亜戦の結果、南方十億の諸民族が既に新生の途上にあることは、現地からの報道によつて十分に知られる処である。その地方はマレー、比島、東印度諸島、ビルマ及び泰、仏印、更に印度をもこれに挙げるこゝとが出来よう。而してこれらの諸民族が如何に新生しつゝ、あるかは、畢竟、大東亜戦の性格乃至、共栄圏建設における日本の理念のうちに規定づけられるものであることは言ふまでもない。

さらに成田は、『この戦争によつて日本は更に広茫たる南方圏の物的並びに人的解放と新建設といふ世界史的課題を自らの上に課した』(111頁)と、日本の責任を言明する。《日本の南方建設に、世界的な意義》(51頁)をみる坂本徳松も、「南方諸民族の生活文化——村落共同体を中心に——」(『統制経済』昭17・10)において次の文化工作論を示す。

われわれには、これまでヨーロッパ的経済の発展の半ば無意識的、盲目的な必然性に導かれて来た米・英・蘭流の植民政策と異り、これらを批判した上での新しい意欲と行動の自由がある。而も、われわれは大東亜といふ地域的・歴史的な親近性に恵まれてゐる。それらを基礎とし、条件としてそこに新しい東亜の主体的な立場が確立されねばならない。それこそ新秩序の内容に価するものであらう。(54～55頁)

このように、西洋諸国を対置しながら、東亜の盟主たる帝国日本が南方諸民族を文化において導いていくべきで、そのことによつて南方諸民族は《主体性の確立》を果たす。

他方、文化工作論についての指針も、折々示されていく。飯澤章治は「南方文化政策の基調」(『外交時報』昭17・12)において、『先づ文化工作の基本条件としては民心の把握といふことが前提』であり、『この民心の把握といふか、収攬といふことは一切の統治の基礎となるべきものであり、之れが出来る出来ないによつて東亜共栄の理想を実現し得るか否かのバロメーターとなり得る』という前提を示してから、『民心を把握する手段の一つとして適當なる標語を選んで之れを南方民族に注入することが第一に執られてゐる』ことにふれ、それらが《余

りに高邁過ぎるきらひがある」と指摘し、『南方民族に働きかけるためには、もつと簡單率直でなければならぬ』(96頁)という。その上で飯澤は、『第一 現在の米英に対する戦争を単なる思想戦であるといった抽象論は適當ではない』、『第二 故に日本の主張する東亜共栄圏の確立は米英の治者被治者の関係でなく、家族主義を基本とする民族の共栄にあることを高唱すべき』、『第三 被治者解放戦である事を正しく認識せしむべき』、『第四 アジアは一なり、といふ我等が先人の理想を徹底的にしみ込ませる事』(96～97頁)といった四ヶ条を掲げ、『彼等の持つ個有の文化、伝統、風俗、習慣、かうしたものを充分咀嚼し研究し尽して後、その中で保護助長すべきものは之れを尊重し、之れに日本文化を加味して自然に日本文化に融合するやうに努めることが肝要である』(97～98頁)と結論づけていた。ただし、いずれの指摘も『抽象論』にとどまり、文化工作担当者が現地で、具体的に何をどうすべきかが示されることはなかった。

以上、本節で検討してきた文化工作言説においては、太平洋戦争―大東亜共栄圏のイデオロギーを南方―諸民族に適用していく以上の議論はみられなかった。ただし、諸民族に対する文化工作を主題とした言表が反復されていくこと自体は、日本(人)と諸民族を遂行的に分割し、序列を孕んだ指導者／被指導者の関係を浮上させつつ、多様な民族を一樣に『諸民族』と表象することで、文化工作の対象を言説上で固定化する役割を担った。

IV

本節では、太平洋戦争開戦後における大東亜共栄圏―南方を対象とした文化工作を主題とした言説のうち、文

化人（文学者）に関するものに特に注目して、分析していく。

まず、報道班員による生の声を届けた『現地報告』（昭17・6）の記事を二つ参照する。同誌の牧野義男「編輯後記」（『現地報告』昭17・6）には、次の紹介がみられる。

☆報道班員の組織や仕事の内容について、一般の人はまだ十分解つてゐないやうであるが、本号所載の座談会二つを読めば、彼等の仕事が如何に重要、広汎なものであり、且つ想像を絶した危険なものであるかを知ることが出来る。相次ぐ戦果のおかげに、常に彼等の血の滲む努力、砲煙弾雨を冒しての決死的活動のあることを銘記したいと思ふ。（128頁）

記事の第一は、海野十三・大林清・木村毅「文化建設に活躍する作家——軍報道班員座談会——」である。フイリピンに派遣された文学者が出席し、木村は『フイリツピンにいつてゐる文士達は尾崎士郎君が隊長格で、今日出海君、石坂洋次郎君、三木清君、火野葦平君、上田廣君』（60頁）だという紹介につづき、次のように文化工作にもふれていく。

今までマニラの放送局は享楽の機関だったんですが、日本が占領してからは講演を入れて教養の機関にしましてね。それで文士が書いた原稿を英訳して読ませる。四月の八日には「神武天皇祭の意義について」三木清君がやりました。それから、石坂洋次郎君が「日本の女性について」なんてやるし、僕は「明治以後日本

がどれだけフィリッピンを助けてやったか」といふことについて連続放送をやりました。(笑声)つまり、原稿を書いたり電報を打つたりする以外にさういふフィリッピン人に対する治安工作、或は啓蒙運動もやつてゐるわけです。(61頁)

こうした概要にくわえ、海野には文学者の特殊性に関わる次の証言もみられる。

新聞記者は戦闘の模様を客観的に書いて、さうして電報で送るなり何なりして、いはゆる報道記事を出す。作家はそれと少し違ひまして、作家の持つてゐる読者層に呼びかけて、さういふ方々に報告をし、記事はすぐ書かなくてもいいけれども、新聞記者の方よりももう一歩突込んだものを書かなければならぬといふやうな状態におかれてをりました。(62頁)

いわゆる報道・報告とは差異化されたかたちで文学者に託された右の要請は、「文化建設に活躍する作家」で示された現地向けのものではなく、明らかに銃後国民に向けられたものとみてよいだろう。⁽²⁾第二の記事は、影山正雄・光墨弘「ブキテマに戦ふ写真班 軍報道班員対談会」だが、次に引く影山の発言は銃後国民も意識したものととなっている。

今度の戦争で特筆大書すべきこと、手前味噌のやうですが、報道班員が非常に活躍してゐるんです。今までの

支那の戦争と違ひ、今度の戦争は、資源戦争と言はれるだけに破壊が目的ぢやない。そのために戦闘形式が非常に違つてをるのです。(略)それで私達も報道班員となるからには、仕事の主なるものは、対敵宣伝にある。(略)今度の戦争は一つの一町を奪る場合には、まづ第一に其処の経済的の資源を奪らなければいけません。ところが、資源といふやつは、土地の住民なくしては、完全に機能を發揮しませんから、同時にこの佳民の民心をとらなければならん。これが報道班員の仕事なんです。(74～75頁)

また、下村海南・高村光太郎・笠間果雄・岸本誠二郎「大東亜文化建設の課題」(『知性』昭17・6)においては、高村の《言葉の問題は随分難しいですね》という問いかけに、下村は《現地における原住民に対する教育、現地にゐる内地人の教育、それから内地人の指定の現地における教育もあり、それから原住民の日本への留学の問題などいろいろありますね》、《どちらにしても日本語を英語に代らしてゆくべきですが、日本の言葉は非常に好い言葉なんだけれども、これがまだ統制がとれてをらない》(28頁)と応じていた。ここで《現地》とは大東亜共栄圏・南方で、右のような事態は、端的に日本語を使用すべき地域が、短期間に飛躍的に拡張したことによつて顕在化してきたものである。この問題については、笠間も《私は今のお話のうちで、共栄圏内の文化問題といふやうなものは、日本文化にやはり普遍性をもたせるやうにリードしなければ不可ない》という立場から、《日本語といふものを向うに向けてゆくやうに日本語自体に普遍性をもたせて、もつとジャバ人が見ても、マレー人が見ても、フィリピン人が見ても、これなら大体通用し易いといふまでにしてゆくことが必要》(35頁)だと論じていた。この論点は、田邊尚雄「日本語と文化工作」(『文芸春秋』昭17・12)においても、《南方に対す

る文化工作の第一歩は先づ日本語の普及にあるといふので、今や日本語の普及が盛んに企てられて居り、既に漢字の制限やら日本語綴り方の方針まで発表されるといふ有様であるが、之には国学者の間にも種々の意見の相違があつて、仲々困難の問題らしく見える》(8頁)と評されていた。⁽⁸⁾

また、日本による南方文化工作の困難についても、高村は次のように問題化していた。

もう一つの問題としては、蘭印にしる何処にしる、日本の文化をもつて行つた場合に原住民がそれと英国、米国の文化とを比較するでせう。さういふ時に日本人がはつきりこつちの腹を決めるにはどういふ風に考へるべきかといふ事がありますね。(44頁)

現実的なレベルにおける日本の文化工作やそれを支える指針は、旧宗主国のそれより何かしら優れたものでなければ《原住民》を納得させることは難しい。ただし、文化工作言説の大勢は、こうした課題の解決ではなく、戦意高揚のためのプロパガンダに終始した。

そうした中、具体的な行動・実践となったのは、大東亜共栄圏の文学者を集めて開催された大東亜文学者大会⁽⁹⁾であり、それに連動して言説としては特集「大東亜文学集」(『時局雑誌』昭17・10)が組まれた。同特集は、無署名「編輯言」で次のように紹介された。

★大東亜会議が近く東京で開催される。米英の覇権を脱した大東亜諸民族の文芸が雄々しく復興するため

相互の交合発展を指導するのは日本の任務である。ここに集めた作品は必しも大東亜戦争以後に書かれたものではないが、諸民族の感情表現として意義あるものと信じる。尚兪鎮午氏の作品を入れたのは日本の一方文学としてであることを附加する。(160頁)

この特集には、兪鎮午「手術」(日本・朝鮮)、爵青「山民」(満洲)、沈啓元「刻印小記」(中国)、ウエーターン「囁の樹蔭」(泰)、阮江其他「仏印詩集」(仏印)、作者不詳「豊年祝ひ」(比島)、タゴール「アマとヅキナヤカ」(印度)の七編が掲載され、その内容や文学的な質は置くとして、大東亜共栄圏の広がり、は誌面上においても可視化された。

昭和一八年に入っても、文化人による文化工作論として、二つの雑誌特集がある。

その第一は、南方を体験した文化人による「南方文化建設研究号」(『国際文化』昭18・5)である。中島健蔵は「南方とヨーロッパ文化——マライ雑感——」において、『我々が先づ第一に理解しなければならぬのは、文化的に干渉するにせよ、無干渉で置くにせよ、今までヨーロッパ的なるものが仲々滲透し得なかつたやうな事実が、これから先大東亜圏内では同じやうな調子では行かぬ』(32頁)と述べて、注意を喚起していた。これに対して今日出海は「比島文化随想」で、『比島が他の南方諸地域に比して民度が高く、深刻な米英的影響に侵されてゐるために、文化工作が最も面倒且つ困難と見做されてゐるやうだが、私は必ずしも困難だとは思つてゐない』と判じた上で、比島人について『性質も温良で従順である』がゆえに、『指導宜しきを得るならば、早く皇化に浴して、新しき比島の再建に力を致すであらう』(40頁)という見通しを示した。阿部知二も「ジャワ文化

「覚書」において、『我々の文化的働き掛けは全く希望に富むと云ひ得る』と樂觀的な見通しを示した上で、『構造は西洋人のそれと根本的に異つて居よう』、『彼等が表皮から作用して滲透しようとするのに対して、我々はまづ底流に於て通ずるものを掴んで、その上に築いて行くといふことになる』がゆえに、『我々の構造がより確實』(47頁) だという。小林清榮は「セレベス文化考」において、戦争の後に『来るものは日本文化の進入と彼等原住民の精神的目ざめ』(54頁) だと述べた上で、文化工作の重要性を次のように示す。

彼等〔原住民〕は決して下等な人種でないとすれば、私共日本人の課せられたる使命は重大であり光輝ある、彼等に何を感じさせて此の大東亜共栄圏を、美しき楽土に仕立上げ、此の原住民の最も希望する喜びを与ふ可きであらうか。学問、芸術、又宗教に今こそ彼等南国民の本体を満足せしめて初めて私共がセレベスの文化について語り得る時代を見たいものである。(54～55頁)

もちろん、こうした希望の裏で小林は『フリリッピンの文化は過去数百年の間にスペインと米国に禍されて真の自己を忘れたる形上の文明にとらへられ、今私共の目の前には彼等植民政策の罪悪の残骸を見せらるゝ許り』(55頁) だという現状を捉えてもいる。清水幾太郎は「東洋の涯——ラングーン日記抄——」において、『ロンギ〔ビルマ人が用いる腰巻〕をやめることは、ビルマ人であることをやめるかも知れぬ危険と結びついてゐる』、『ロンギ一枚のことで伝統が揺ぐと感ずる自信のなさではどうにもならぬ』と指摘した上で、『日本がビルマを独立させるならば、ビルマ人はきつと自発的にその服装や信仰を変ずるであらう』、『変へても大丈夫といふ安心と

自信とを得るであらう》(60頁)と解決の道筋を示した。こうして南方各地の文化に直接ふれた文化人たちは、旧宗主国と現地文化とを視野に入れつつ、日本が大東亜共栄圏を確立するための注意点を言表していった。

雑誌特集の第二は、特輯「新しき文化職域」(『知性』昭18・6)である。加田哲二は「戦争と文化人の職域」において、まず、《今次の戦争は、一つの重大なる文化戦争》(3頁)だと位置づける。次いで、《戦争の現在の形態は、否応なく、文化人を、直接に戦争に関連せしめる》という加田は、《第一に、男子の国民として第一線に起つ》、《第二に、国家要請にに応じて、戦線、銃後の文化戦争のために徴募される》、《第三に、任意的に個人または団体をもつて、戦争遂行の文化的使命を遂行する》、《第四に一般国民として戦争の遂行に微力を捧げる》とその具体相を列挙した上で、《かくて、文化人も勿論戦争の埒外に立つてゐるものではない》(4〜5頁)とまとめると。さらに加田は、思想戦を展開するために《それぞれの領域、民種、運動に対する正確な調査研究》(8〜9頁)が必要だとして、それを《文化人に最もふさはしい仕事》だと位置づける。最後に加田は、《指導的階級の把握に対して、わが文化人が工作の一部面を担当することは、適当である》と述べて、その理由として《文化人としての共通的感情》(9頁)をあげていた。岸田國士は「文化職域について」において、文化人の《職能》として《文化的専門領域内に於ける技術の習得》(12頁)にくわえ、次のような《新しい二つの方向》を要求していた。

一つは、文化各専門領域の政治的運営といふ方向、即ちそれぞれの領域を国家目的に応じ如何に進歩発展せしむべきか、またこれを如何なる理念によつて統一すべきかといふ問題等々に関し、或ひは国家行政の面

に、或ひは経済の面に働きかける一つの仕事がこれである。／もう一つは、それぞれの専門領域を国民生活に結びつけ、所謂「文化」と「生活」との有機的な交流をはかり、これによつて各専門領域の發展を飽くまでも生活から遊離せしめず、また国民生活の文化水準を高めるといふ仕事がこれである。(12～13頁)

右は、さしあたりは国内文化工作とみるべきもので、文化各専門間を相互交渉させつつ活性化していこうとするのは岸田の持論⁽¹⁰⁾でもある。中島健蔵は「南方軍政下の働き場」において、《南方に於いて、文化人にとつての新しい職場が出来てゐることは明か》だとしつつも、《さういふ職場のいづれにせよ、適格者たる条件が、内地とはよほど違ふ》ことに注意を促し、《私一個の考へとしては、すべての点で内地よりも厳格な、しかも柔軟大な資質を要する》(19頁)と述べて、文化工作に関わる人材の重要性を強調していた。こうして、こちらの特集では文化人を南方と内地とを媒介する存在、機能として捉え、相互を往還するようなかたちで大東亜共栄圏における文化工作の急所が論じられていった。

総じて、太平洋戦争開戦後には南方文化工作言説も盛況を呈し、太平洋戦争―大東亜共栄圏を支えるイデオロギ―だけでなく、南方を直接体験した文化人の言表も産出されていった。それらの言説によつて、大東亜共栄圏の諸民族の理解に努め、大東亜文化を主導していく帝国日本の立場は幾重にも上塗りされ、実際の運用論がほとんどみられなかった一方で、戦意昂揚の修辞^(キリツク)は反復されていった。ただし、それらを言表した文化人(文学者)にとつて文化工作言説に関わることは、戦時下において戦争への貢献―自身の社会的存在意義の表明を意味し、その返照としての社会性の表象を獲得していくことでもあった。⁽¹¹⁾

本稿における主要な問題関心である、太平洋戦争期の南方文化工作（言説）の検討はここまでとするが、最後に、日中戦争開戦以来の対支文化工作（言説）を振り返っておく。

中国研究者である實藤惠秀に「対支文化工作基礎論」（近代日支文化論）大東出版社、昭16）がある。同論で實藤は《日本が今後、中国との文化提携もしくは中国への文化工作をせねばならぬ立場にあること》をふまえて、《文化工作をするにあつて、二つの赤字^{あかし}があることを銘記してかゝらねばならない》（161頁）と注意を喚起していた。ここで實藤がいう《二つの赤字》とは、《中国人の日本文化にたいする輕蔑觀念》と《文化的に中国と対等、もしくは中国より上等と彼らが見てゐる西洋人の為した対支文化工作と、日本人の文化工作とが比較されて、日本のそれが見劣りする事》（162頁）である。南方文化工作においても、そのまま課題となっていた右の二点のうち、後者について實藤は《かならずしも、これ〔西洋人による文化工作〕と同様の年月、費用、を要するとはきまつてゐない》、《それは、より誠意をもつてすること、質のことなる工作をすることによつてのみ可能であらう》とも述べていたが、根本的な解決策となると《日本人のまごころ、日本総文化のいやが上にもの上》（174頁）といった理念的抽象としてしか示されなかった。

その後、太平洋戦争開戦後の座談会「大東亜文化建設の課題」（前掲）においては、対支文化工作を経ての南方文化工作について、次のやりとりがみられた。

岸本（誠二郎）

〔略〕支那について既に文化工作のいろ／＼の経験をもつてをりますが、さういふ場合に工

作上いろ／＼無理な点があつたといふ話を聞いてをりました。さういふ経験を基礎にして南方諸民族と文

化的に結合してゆくのに、どういふ条件を備へた人間を出したらいいか、どういふ点に着眼したらいいかといふことなんです。

笠間〔梶雄〕 差当りそれこそ一番多くの民衆に接触するものは映画、音楽、放送、などでせうね。さうすると今言つたやうに、みんな欠点があるんです。ですから相手方を知る必要があるのです。支那といふのは日本人が一番よく知つてゐる。それでさへ宣撫工作、文化工作は日本の頭でやつたんでせう、独善が多かつたんでせう。支那でさへしくいんだから、好い加減に日本式に考へてやつたら、やはり駄目です。

(37頁)

メタ文化工作言説とも称すべき、こうした批評的な言表において文化工作の問題点が指摘されたとしても、すでに範型を整えた言説が構造的な変容を遂げることはなかった。

《大東亜戦争》を《思想的見地からいへば、一如の精神を基調とする東洋から、対立精神を基調とする米英を折伏せんとするにある》(54頁)と意味づける常磐大定も、「対支文化工作への反省」(『中央公論』昭19・2)において、次のような反省を言表していた。

大日本帝国は、世界の大半を向うに廻して大東亜を建設せんとしてゐるのである。こゝに当面の問題となるものは、いふまでもなく支那である。(略)従来もつとも近く、もつとも知らねばならぬ筈の支那の研究が不充分で、したがつてその認識の不足なることが、彼をしていたづらに誤解せしめ、疑懼せしむることとな

つたのであるから、われに於てまづ彼を研究し、認識を新たにする必要がある。(58頁)

これが太平洋戦争開戦から二年経過後、日中戦争の開戦からは六年半も経過して後の発言であることに、重い意味がある。この間、帝国日本は中国戦線を維持したまま、大東亜共栄圏構想を掲げて南方へ進出していったが、その間にも文化工作言説は産出されつづけていった。

注

- (1) 栄沢幸二『大東亜共栄圏』の思想(講談社、平7)、河西晃祐『大東亜共栄圏 帝国日本の南方体験』(講談社、平28)ほか参照。
- (2) 注(1)栄沢著に同じ、207頁。
- (3) 赤澤史朗「戦中・戦後のイデオロギーと文化」(『戦中・戦後文化論——転換期日本の文化統合』法律文化社、令2)、282頁。
- (4) 注(3)に同じ、282頁。
- (5) 拙論「昭和10年代における〈文化〉論・Ⅱ——日本文化／大東亜文化／世界文化」(『湘南フォーラム』令2・3)参照。
- (6) 拙論「文学(者)と思想戦」(『太平洋戦争開戦後の文学場 思想戦／社会性／大東亜共栄圏』神奈川大学出版会、令2)参照。
- (7) 帰還した南方徴用作家の作品受容に関して、拙論「帰還する南方徴用作家・序説——尾崎士郎「朝暮兵」・火野葦平「敵将軍」」(『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房、令3)、「帰還した南方徴用作家の内省——高見順「帰つての独白」」(『神奈川大学アジア・レビュー』令3・3)参照。
- (8) 拙論「軍政下昭南市における文化工作(日本語教育)一面——陸軍報道班員・井伏鱒二「花の町」を手がかりに」(『立教大学日本文学』令1・7)もあわせて参照。
- (9) 大東亜文学者大会については、拙著『太平洋戦争開戦後の文学場』(前掲)参照。

(10) 拙論「昭和10年代における〈文化〉論Ⅰ——大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に」(『湘南フォーラム』平31・3)参照。なお、岸田國士「国民の誓ひ」(『文学界』昭17・3/全集未収録)には、文化工作に関する次の示唆的な一節が読まれる。

文化工作として先づ日本の真の姿をはつきり知らせる必要があります。文書による宣伝の外、映画の活躍する舞台がなかなか広いのでありますが、これはもう準備が整つてゐるでせうか？ 少し心細いやうに思ひます。日本語の普及をはじめとして、学校の経営、指導にも乗り出さなければなりません。医療施設の万全を期することも急務であります。すぐさういふところへ手が届くでせうか？ 宗教家に何等かの用意ありや？ 南方民族に関する学術的研究がどの程度まで進められてゐたか？ かういふ風に考へて参りますと、われわれは、今迄、何をしてゐたかと思はれる節々が非常に多いのであります。／殊に、将来に互つて最も禍根を残しはすまいかと思はれることは、米英の異民族統治法が、如何に人道に反するものであつたにせよ、彼等には白人独特の政治的謀略があり、物質文明を誇り示すことによつて、楽々と優越的な地位を占めることができたのであります。今や、白人をもつて最優等の人種と見做す習癖は東亜諸民族のなかに深く根をおろしてゐるに違ひありません。われわれ日本人は、先づこの迷妄を打破してかゝらなければなりません、それがためには、例の物質文明に代るところの、しかもそれ以上に彼等東亜諸民族にとつて魅力あり、渦仰おくことのできぬやうな「何物か」をわれわれが如実にもたらすことが絶対に必要であります。(48頁)

(11) 拙論「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」(『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27)、「太平洋戦争開戦後における文学者の使命・役割」(『太平洋戦争開戦後の文学場』前掲)参照。

※本研究はJSPS科研費JP20K00823の助成を受けたものです。